

概 要 報 告

実施期日	令和8年8月4日(火)
部会名	中学校 国語部会

研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善
(含む個別最適な学びと共同的な学びの一体的充実)

テーマ

『読むことを通して人や社会との関わり方を考えさせる授業』

提案概要

○生徒の実態と設定理由

生徒たちは卒業を間近に控え、結果が見えにくい授業に意欲をもちにくく、一つに定まった正解を効率よく求めようとする姿勢が生まれやすい。このような状況の中でどのような題材で、どのようにして生徒たちの学ぶ意欲を高めさせる授業を行うべきか。本提案では、以上に述べた時期だからこそ答えのない学びに意義があるとし、価値観の相違や社会的な壁に直面する人々を描いた「故郷」を作品内の「悲しむべき厚い壁」と重ねて取り上げる。生徒が自己と社会を客観視する視座を養い、卒業後に社会と関わりながら生きていくための大きな指針となる授業を目指す。

○実践内容（生徒たちの学ぶ意欲を高める手立てと成果）

① 時代背景の提示のタイミング

生徒が違和感を抱いた段階で背景知識を提示したことで、自ら時代背景を調べる主体的な生徒の姿がみられた。

② 作品を現代と接続させる

「故郷」の「厚い壁」という言葉から「現代の私たちを隔てる厚い壁は何か」と問いかけ、学習支援アプリケーションを活用してまとめさせた。「SNSによる分断、世代間ギャップ」等の意見が上がり、自らの生き方や社会の在り方と接続させて吟味することに繋がった。

③ 既習学習との接続

生成AIを使い、「握手」のルロイ修道士なら大人になったルントウにどう声をかけるか」と問いかけた。生徒たちからは「ルロイの言葉が綺麗事だ」などの批判的な意見がみられ、単なる模範的な解釈に留まらない考察を生むきっかけとなった。

○課題

① 模範的な解釈に陥りがちな傾向

多くの生徒が「希望」という前向きな結論に落ち着いたため、作品の救いのなさや深く葛藤する時間の確保が必要である。

② 学習課程の必然性と誘導のバランス

教師が意図した論理構成へ誘導しすぎず、生徒自身の問いから主体的に学びを深めるための指導バランスを検討する必要がある。

③ 即興で行った活動の可能性と課題

生成AI活用の有効性を活かし、単なる「寄り道」で終わらせず、単元目標の達成に向け計

画的に位置づけていく必要がある。

質疑応答

質問①：「故郷の学習」を通して、目指していた生徒像は何か。

回答①：単元目標である「文学の内容を自らの生き方、社会に接続させる生徒を目指した。しかし、実際には生徒たちが作中の「悲しむべき厚い壁」を十分に実感しきれていないと感じる部分もあった。

質問②：生成A Iを用いた活動で、今後も活用できる作品があれば教えてほしい。

回答②：まずは今回の提案で扱った「故郷」。他にも活用できる作品は多くあると考えている。

質問③：文学と社会との関わり方を接続させる手立てはあるか。

回答③：今回実践した手立てとしては、「現代における悲しむべき厚い壁とは何か」という問いに対する自分の考えを学習支援アプリケーションにまとめる活動を行ったこと。

質問④：「故郷」の魅力は何か。

回答④：作品全体が持つ、独特の暗い雰囲気。

質問⑤：生徒たちは、なぜ生成A Iが作成したルロイ修道士の言葉に違和感をもったと考えるか。

回答⑤：当時の時代背景を調べる過程で、ルントウの置かれた生活の「どうにもならなさ」を感じ取っていたからだ考える。

質問⑥：生徒たちと「故郷」という作品についてどのような話をしたか。

回答⑥：生徒から「先生が以前から好きだと話していた「故郷」を読めてよかった」と言われたことが嬉しかった。

協議の柱及び協議概要

協議の柱「主体的に学ぼうとする生徒を育てるための工夫」

① 生徒の学ぶ意欲が高まっていると分かるのは、子どもの顔や発表がどのような状態の時か。

→前のめり、顔があがる、呟きが増える、質問が増える、授業後も話が継続している等。

② 生徒が学びに対して意欲のある態度に変わったときの手立てはどんなものがあるか。導入、展開、終末に分けて考える。

→導入…生徒に身近な話題の提示（「考えたい」と思える発問）、学習支援アプリケーションのアンケート結果から意見を募る、お手本になるスピーチやプレゼンの動画視聴、先生出演ビデオ視聴

展開…あえて逆の発問を行う、スピーチなど発表を審査させる、グループノート作成、覚える系のものはゲーム化・かるた化する、席の形を変える、役割分担カード作成

終末…良かったものの掲示や発表、「？」となるような問いの設定、学んだことを使ったクイズ作成

まとめ概要

本提案は、中学3年生の「故郷」を題材に、文学の内容を自己や現代社会と結びつけて捉えることを目標にしたものである。授業では作品背景の時代制度と現代のSNSや格差といった「見えない壁」を関連付けさせ、百年前の物語を自分ごととして捉え直させた。また、生徒からの提案をきっかけに生成A Iとの対話を導入し、生成A Iとの対話を通じて自らの考えを更新する活動を行った。今後は、模範的な結論に落ち着かないよう、作品の「救いのなさ」と深く葛藤する時間を確保するなど、より深い学びへの改善が求められる。